新見公立大学紀要　第38巻2号
pp. 173－177, 2018

報　告

中山間地域の保育短大生が取り組む地域間交流型実地体験活動の意義

－新見市萬歳地区住民との交流から－

八尋　茂樹[1)]*

1）新見公立短期大学幼児教育学科

（2017年12月20日受理）

中山間地域に所在する新見公立短期大学では、交通の便の悪さゆえにボランティア活動が大学近隣の地域に限られている。大学から離れた地域からも学生への行事参加の要望、要請はあるものの、それに応えることは十分にできていない。筆者のゼミナールに所属する保育学生は、ゼミで取り組んでいた地域の子どもたちへの貢献活動である駄菓子屋模擬店を、ゼミ活動を超えた地域ボランティア活動に発展させ、遠方の地域へ出向いては子どもたちや住民との交流を活発に行なった。交流が数回続き、地元住民の理解を得られるようになると、課題のひとつである現地までの送迎を住民の協力で克服することができた。この「地域との連続的、継続的な繋がりの強化」は、次年度のゼミ生に引き継がれ、学生たちは「ボランティアをしに行く」という他者に対して一方的な感覚から「地元の活動に参加する」という自分と住民との間の双方向的な感覚に移行し、活動終盤には教員の指示ではなく、自発的に計画・行動するようになっていった。学生たちは、訪問先の地域、あるいはそこの子どもたちや住民に対して愛着を持つようになり、自分たちが遠方から足を運ぶ「よそ者」であるという意識が薄れ、実習等では体験できない「地域の子どもたちの成長を住民の方々と一緒に見守っている実感」を得るまでに至った。これらの成果から、活動地域の住民や団体などと積極的かつ継続的に関わり続けることは、活動をする者と活動を受け入れる者の関係が対等で良好なパートナーの関係に昇華し、実地体験活動の教育効果をより一層高めることがわかった。

（キーワード）保育学生、地域貢献、実地体験活動、中山間地域、継続的取り組み

1．はじめに

本稿では、新見公立短期大学幼児教育学科の学生が取り組んだ地域間交流型実地体験活動[注1)]についての報告である。中山間地域で学ぶ保育学生が、地域の中に入って活動することで、学生たちは地域に何をもたらし、また、自らの専門分野においてどのような影響を受けたかを振り返ることにより、いかなる実地体験活動の方法が教育効果をより高めるかを考察する試みを行った。

2．岡山県新見市の実情について

新見公立大学・新見公立短期大学（以下、本学）が所在する新見市は岡山県の西北端に位置する中山間地域である。他の中山間地域の町同様に、人口の減少や少子高齢化が進み、集落機能の維持に多くの課題を抱えている。中村・小林（2016）は新見市のその現状について、「『多子化の家庭設計の中にあって、集落の維持は保たれていた』と言えるのだが、子供を多くもうけなくなった現代において、世帯数はおおむね維持されつつも『跡継ぎがいない』事態が発生し、人的地域維持の機能が失われていくこととなる。いわゆる『少子高齢化』である。こうして、新見市の現在につながる人口減少は、一度の回復も見ないままに進行してきたのである」と述べている[1)]。また、岡山県中山間地域県・市町村連携協議会（2009）は、岡山県の中山間地域は「そこに住み続けるために必要な活動や、祭り・運動会などの季節行事の開催、冠婚葬祭時の相互扶助、共同利用の農業用施設の管理、文化や技能の伝承などの集落機能が低下している」と記している[2)]。実際に新見市の地域の季節行事に参加してみると、中高校生から20代、30代にかけての若い世代の住民の姿がほとんど見られないことも多く、高齢者が作り出すあたたかい空間を感じる一方で、躍動感には欠け、粛々と行事が進行していく印象が強い。

3．本学幼児教育学科学生の地域行事参加について

本学幼児教育学科では、保育士資格と幼稚園教諭二種免許状の取得を目指して、2つの学年を合わせて100名程度の保育学生が日々学んでいる。短期大学の2年間でこの2つの

*連絡先：八尋茂樹　新見公立短期大学幼児教育学科　718-8585　新見市西方1263-2

資格・免許状を取得するためには、非常に密なカリキュラムをこなしていかなければならず、必然的にアルバイトやボランティアに積極的に取り組むことも容易ではない状態である。しかし、スケジュールの隙間を縫って、保育担当教員が中心となって保育学生を指導・引率し、地域の行事（例えば、ハロウィーンやクリスマスのパーティーなど）に参加することで、地域の子どもや保護者、高齢者などとの交流を積極的に行い、大変好評を得ることができている。一方で、数十名の学生が一度に参加できるのは、中山間地域特有の交通の便の悪さゆえに大学近隣の地域に限られてしまい、大学から離れた地域からも学生への行事参加の要望、要請はあるものの、それに応えることは十分にできていない。

４．大学から遠方の地域への地域行事参加について

筆者のゼミナールに所属する保育学生は、社会福祉領域における児童家庭福祉の視点から、子どもの見守りネットワークの構築について取り組んできた。地域住民同士の繋がりを強化して地域全体で子どもを育てる機運を高め、特に母子が地域で孤立しないようにすることを念頭において活動を行ってきた。例えば、八尋（2015）で検討したように、幼児から高齢者まで幅広い年代の共通の話題になりうる駄菓子や駄玩具を扱った交流の場「駄菓子屋模擬店」の大学祭での運営もそのひとつである[3]（写真１）。しかし、大学敷地内での運営のため、これもまた、大学近隣住民中心の来店となり、大学から遠方の住民の多くは開催されていることも知らなかった。そこで、2016年度のゼミ生たちは、駄菓子屋模擬店をゼミの活動を超えた地域ボランティア活動に発展させ、同じ学科の保育学生たちに呼びかけることで活動人数を増やしながら、遠方の地域へ出向いては住民との交流を活発に行うことを目標に掲げた。遠方の地域の行事に駄菓子屋模擬店を出店させていただく交渉を行い、教員引率のもと、まずは萬歳地区の中山八幡神社夏祭り（哲多町矢戸、2016年7月18日）で実施することとなった（写真２）。すると、後日、同地区の住民や萬歳小学校校長から、「私たちはこの出会いを大切にし、これからも交流を継続したい」との連絡が入った。具体的には、萬歳小学校で開催される萬歳ふれあい運動会（2016年9月18日）への学生の応援参加の要請を受け、本学幼児教育学科の学生と萬歳地区の子どもや住民との交流が継続されることとなった。課題のひとつである現地までの交通手段は、地元の方々が手分けして車で学生たちを送迎してくださった。

写真１　大学祭で実施した駄菓子屋模擬店の模様

写真２　中山八幡神社夏祭りで実施した駄菓子屋模擬店模様

５．大学から遠方の地域への地域行事参加の成果について

本学のある西方地区から萬歳地区までは15キロ離れており、車でも30分程度かかる。短大生は2年間のみの学生生活ということもあって自動車を所有せず、主に自転車か徒歩での移動である。このような利便性におけるハンディキャップもあり、これまで学生たちは自分の意思で萬歳地区に行ったことは全く無かった。さらに、萬歳という地区名や、新見市のどこにあるかも誰も知らなかった。しかし、交流から半年で、学生たちは萬歳地区や子どもたち、住民の方々に対して非常に愛着を持つまでに至った。2016年度のゼミ生は卒業論文「中山間地域の短期大学生が地域と繋がることから得た学び」において、愛着を持つまでに至った過程について記している[4]。まず、最初の中山八幡神社夏祭りの駄菓子屋模擬店では、ゼミ生が萬歳の幼児や小学生、中学生と非常に親しくなれたことや、世代を超えた住民同士での交流ができたことを以下のように解釈した。

子どもや住民方々と親密になれる理由のひとつは、模擬店の内容を駄菓子屋にしていることとも関係する。例えば、たこ焼き屋を開いたとすれば、1回買いにくればお腹は満たされ、何度も店を訪れようとはしない。接点はせいぜい1回のみに終わる。しかし、駄菓子や駄玩具は非常に安価であって子どものお小遣いでもたくさん買うことができるし、駄菓子で空腹が満たされることもない。そのため、開催中の半日のうちに何度も何度も訪れ、自然と店員役の私たち学生と親しくなっていく。この傾向については、大人にも当てはまるが、子どもの方が顕著であった。また、駄菓子などは子どもからおじいさんやおばあさんまで、幅広い年齢層での共通のアイテムになりうると私たちは考えている。駄菓子屋では、子どもたち同士で遊ぶ他、子どもにとって「古くて新しいもの」である駄菓子や駄玩具を通して、大人が子どもに食べ方や遊び方を教える。その姿はこれからの未来を築く子どもたちにとって大切な世代間交流がおこなわれているように、保育者を目指す私たちの目には映った。

そして、続く萬歳ふれあい大運動会では競技や運営において、学生たちと子どもたち、学校関係者、地域住民との共同作業となったことで接点が多くなり、一層交流を深めることができた。学生たちは、お祭りではしゃいでいた子どもたちが真剣に競技や準備に取り組む姿に新しい発見があったと感想を述べている（写真３）。

写真３　萬歳ふれあい大運動会における活動風景

その後、学生たちは萬歳小学校学習発表会（2016年11月27日）への招待を受け、全員で訪問した。卒業論文には以下の通り記している。

ここでは劇や歌を披露する子どもたちの短期間での成長ぶりを肌で感じることができた。また、萬歳小学校の生徒と地域住民の方々との年間活動報告のプログラムでは、私たち短大生とのふれあいについても触れてくださり、私たちの存在を単なるボランティアとしての受け入れを越えた、あたたかい関係にあることを示してくださった。さらに、仲の良くなった小学生だけでなく、地域の方々が代わるがわる、孫のような若い私たちのところに、わざわざご挨拶に来て丁寧に頭を下げてくださった。そして、萬歳小学校のホームページ上での活動報告にも、「新見公立短大の学生さん、本当にありがとうございました」と記載していただいた。私たちはこのような対応をしていただけたことが大変うれしく、萬歳小学校の子どもたちや先生方、この地区の方々と出会えて本当に良かったと心から思った。…中略…そして、このような姿勢で大切に接していただいたことが、次も一生懸命取り組みたいという私たちのモチベーションにつながっていった。

学生たちはこの学びについて、第12回地方創生にいみカレッジ・鳴滝塾（2016年12月8日、新見市学術交流センター）において市民に向けて発表した。萬歳地区住民も数名出席し、意見・感想を求められた何人かの住民は涙声になりながら学生たちの活動の姿勢を称えた。そして、2016年度ゼミ生は、以下のような学びを得て卒業していった。

私たち学生は、ただボランティアをして地域への貢献をするという一元的な目的にとどまらず、その地域と連続的な、継続的な繋がりを強化すれば、子どもたちの成長を見守る機会を与えられることを知った。また、人と人とが真摯に向き合うことの大切さも学ばせていただいた。

この「連続的、継続的な繋がりの強化」は、2017年度のゼミ生に引き継がれ、学科を超え、さらに卒業生の参加も加えて、萬歳地区との交流を行った。まず、前年度同様に中山八幡神社夏祭りでの駄菓子屋模擬店の出店（2017年7月18日）、萬歳ふれあい大運動会（2017年9月10日）への参加をした。さらに、中山八幡神社秋祭り（2017年11月12日）には、子どもたちの伝統の舞いを見学しにゼミ生は自主的に訪れた。すると、住民の祭事リーダーから伝統的行事への参加を快く許可いただき、その後の祭りの後片付けの際には、伝統芸の話を聞いたり、祭りで使用しお面、道具などに触れたり身に着けたりするなどの貴重な経験まですることができた。

その後、学生たちは萬歳小学校から学習発表会（2017年11月26日）への招待を受け、子どもたちの学びの成果を見学し、この会場においても子どもたちや住民が学生たちのもとを何人も何人も訪れ、継続的な交流を行うことができた。さらに学生たちは今後の自発的な活動のひとつとして、新見市重要無形文化財である哲多町矢戸の蛇神楽御戸開（萬歳ゆめ広場、2017年12月2日～3日）の奉納行事にも参列し、萬歳地区の住民が長きに渡って大切に守ってきた伝統を体感し、理解しようとする計画を立て、実行に移し

た（写真４）。また、萬歳小学校に読み聞かせボランティアとして訪問することを校長、教頭に相談したことも、学生自らの提案であり、子どもたちの希望もあり、今後実施される予定である。

写真４　蛇神楽御戸開に参加し，地域住民や子どもたちと交流を深めた学生

2016年度の学生は萬歳地区の住民と交流を重ねたことから住民との関係を築いて地区に慣れ親しんだものの、活動を引き継いだ2017年度の学生は当然ながら初めて接する住民に対して最初は心の距離があり、どこまで踏み込んでいいのかなどの戸惑いから、学生たちの方が住民との間に壁を作り上げ、関わりを閉ざしてしまったという負い目のような感情を抱いていた。しかし、萬歳地区の住民は前年度の学生の活動への感謝の気持ちから、緊張する新米学生たちに住民の方から歩み寄り、あたたかく受け入れてくれたことで一気に距離は縮まった。学生たちは「先輩たちが繋がりを深めてきてくれたことに改めて感謝した。私たちも本気で住民の方々や子どもたちの中に入っていきたい」と最初の活動の振り返りで述べた。その後も交流を深めていくにしたがって、学生たちは萬歳地区と子どもたちや住民に対して愛着を持つようになり、自分たちが遠方から萬歳に足を運ぶ「よそ者」であるという意識が薄れてきているという意見、萬歳の子どもたちの成長を住民の方々と一緒に見守っているという実感がわいてきているという意見がゼミ生からは出た。

６．まとめ

学生たちは地域に貢献し、地域を元気にすることを主な目標のひとつに掲げて実践を開始したが、実際には自分たちが住民から元気をもらい、地域に育てられた。地域の中に入って活動したことにより、短期の保育実習等では学ぶことが難しい「地域で子どもの成長を継続的に見守ること」も体験することができた。萬歳地区の高齢者や児童の保護者は、学生たちに対して孫や子どものように大切に接し、そのあたたかさが学生たちのモチベーションを高め、活動の過程の中で学生たちは「ボランティアをしに行く」という他者に対して一方的な感覚から「地元の活動に参加する」という自分と住民との間の双方向的な感覚に移行し、活動終盤には教員の指示ではなく、自発的に計画・行動するようになっていった。齊藤・木村（1997）が学生のボランティア活動には、若い労働力として貢献し、一方で自らの専門性を高めるという報酬を得る構造があることを指摘しているように[5]、学生が地域の中に入っていき継続的に活動をすることは、地域と学生の双方に利点があることが確認できた。さらに、学生の代替わりごとに関係をリセットせずに「縁」を引き継ぐことで、学生たちは地域の一員としてすぐに認められて住民に溶け込み、「住民との協働」を積極的に推進していくことが可能となっていった。大江（2008）は、地域において町おこしのような試みを実践するには、「よそ者」が「地元住民」と対等なパートナーとなって参加することが重要であると指摘する[6]。本稿の結論として、教員などの指導者が学生に実地体験活動をする機会を提供する場合、活動する学生が年度ごとに代わろうとも、活動地域の住民や団体などと継続的に関わり続けることが、活動をする者と活動を受け入れる者の関係が対等で良好なパートナーの関係に昇華し、実地体験活動の教育効果をより一層高めることになると考えられる。

注

注１）大学等のカリキュラムにおける「実地体験活動」は、福山市立大学が小学校で授業補助をはじめとする各補助を行う科目が代表的であり（藤原ら、2015）[7]、それは、例えば、進藤ら（2009）が高い教育機能を認めた「教育ボランティア」の流れを汲む[8]。本稿で報告した保育学生が取り組んだ実地体験活動は、教育ボランティアと地域貢献ボランティアを統合した形態をイメージしている。

文献

１）中村 良平、小林 義明：岡山県新見市における地域産業構造の分析、岡山大学経済学会雑誌 47(3), 419-435, 2016.

2）岡山県中山間地域県・市町村連携協議会：晴れ晴れ地域づくり羅針盤～新たな地域運営組織の取組の手引き～、2009.　（岡山県ホームページ）
3）八尋茂樹：教育福祉的視座からみた駄菓子屋模擬店の有用性：地域で子どもを育てる体制作りの新たな考察にむけて、新見公立大学紀要 36, 79-83, 2015.
4）大塚日菜子、篠原千鶴、鈴鹿史乃、芳賀亜都佐、廣山翔太、森﨑のぞみ：中山間地域の短期大学生が地域と繋がることから得た学び、新見公立短期大学幼児教育学科・卒業論文、2016.
5）齊藤宇開・木村健一郎：教員養成系大学への地域のニーズとボランティア―函教大ボランティアネットワーク一年目の取り組み―　学校教育学会誌（北海道教育大学）、2、145-156、1997.
6）大江正章：地域の力―食・農・まちづくり、岩波書店、2008、66.
7）藤原顕、森美智代、濵原泉：小学校での教育実習と実地体験活動を通した学習経験：福山市立大学教育学部生を対象として、福山市立大学教育学部研究紀要3、111-121、2015.
8）進藤聡彦、勢田二郎、澤登義洋、角田修：大学生の教育ボランティアが教育実践力の育成に及ぼす効果、教育実践学研究、山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 14、139-151、2009.